

令和元年度第1回大分県総合教育会議 議事録

【日 程】

日 時 令和元年6月27日(木)
開会10時00分 閉会11時00分
場 所 県庁本館4階第一応接室

【出席者】

総合教育会議構成員	大分県知事	広瀬 勝 貞
	大分県教育長	工藤 利 明
	大分県教育委員	林 浩 昭
	大分県教育委員	岩崎 哲 朗
	大分県教育委員	松田 順 子
	大分県教育委員	高橋 幹 雄
	大分県教育委員	鈴木 木 恵

【協議・報告事項】

- (1) 久住高原農業高校の開校・くじゅうアグリ創生塾の開所及び高校における県内の土木系人材の育成について
- (2) 人口減少社会の教育課題に対応した遠隔教育の導入について

【議事要旨】

(1) 久住高原農業高校の開校・くじゅうアグリ創生塾の開所及び高校における県内の土木系人材の育成について

○うち、久住高原農業高校の開校・くじゅうアグリ創生塾の開所について
(久保田高校教育課長) 資料に沿って説明

(広瀬知事)

- ・高校改革推進計画では、農業高校や商業高校などの単科校よりも総合的に行う方が良いということで、三重総合高校などを開校したが、今春、久住高原農業高校を単科校として開校した。総合高校のメリットを失ったのか。また、単科校のメリットをどう考えるか。
- ・寮を作り、県内外から農業を志す生徒がやってくるにあたり、どのように取り組んでいくのか。

(工藤教育長)

- ・総合高校のメリットはあるが、久住高原農業高校の開校について言えば、一つは、地域としてしっかり生き残る必要があること。そして、元々単科校であった歴史的な経緯があり、分校ではなく独立して学校運営ができることのメリットが挙げられる。また、県下の農業系高校の生徒と一緒に学び合いができる施設を作るということが非常に大きなメリットと考えている。
- ・寮は、県外からも、学びに来たい方の生活の保証のためにスタートさせた。現在、1名の方が県外からやってきており、しっかり定着させ、良いところだということ認識をしてもらおう。そして、大分県で農業を頑張っていきたいという人を育てて行きたい。

(広瀬知事)

- ・確かに、県内各地あるいは全国から人を集めるときに、農業高校ということではっきりとした特徴が見える構えにしたのは全国から人材を集めやすい。このメリットをどう活かしていくかが大事だ。

(工藤教育長)

- ・高原という名がついている通り、標高600mで、九州で一番高い。様々な農業の展開を試す場として非常に面白い。

(松田委員)

- ・総合学科は、生徒が広い範囲で自分の好きなことを学べる。特に商業科については適していた。ただ、農林水産業については人材育成は総合学科よりも、専門学科がいい

ということではないか。

(林委員)

- ・くじゅうアグリ創生塾は、県内の農家の方から支持を得ている。県内の農業を目指す高校生を応援しようとする体制ができたのは大きい。久住高原農業高校の生徒も刺激を受けるし、最先端の農業を学ぶ体制ができた。

(高橋委員)

- ・くじゅうアグリ創生塾では、ジビエ料理を開発できるだろうし、おいしいワインもできるだろう、牛を使った様々な商品の開発の可能性もあり、発展的に考えられる。
- ・今、若い人達は農業にすごく興味を示している。久住高原農業高校を起点にして、他県から人をどんどん呼び入れて人口増も期待したい。

〇うち、県内の土木系人材の育成について

(渡辺土木建築企画課長) 資料に沿って説明

(久保田高校教育課長) 資料に沿って説明

(広瀬知事)

- ・土木系学科を出たが建設業に就職しない人が多いのではないか。

(久保田高校教育課長)

- ・例えば、中津東高校は、県北地域の製造業の求人が充実しているため、製造業に多くの生徒が就職している現状がある。

(広瀬知事)

- ・土木学科を増やす前に建設業界が体質改善をして魅力的な職場になる必要がある。

(岩崎委員)

- ・建設業界も、トンネルなどの現場に見学に来てもらうという取組を積極的に行っている。業界を挙げて、小・中学校の生徒にも現場に来てもらいたいということなので、教育委員会と協力することはできる。

(広瀬知事)

- ・働き方改革が話題となっているので教育委員会と建設業界と一緒にあって業界の魅力アップを図ってほしい。

(松田委員)

- ・中津東高校は、近くに工科短期大学があり、高校時代からともに学んでいるので、工科短期大学への進学率が高い。

(工藤教育長)

- ・土木系に限らず工業高校からの県内就職率は低い。県外企業が多くの求人を出すため、

現状では6割ぐらいしか県内に止まらない。工業高校からの就職、特に土木系の人材を県内に止まらせることが大きな課題の一つ。だが、それは需要が高いということであり、定員を増やして技術者を養成する必要があるのではないかということ。

- ・養成していく過程で県内への就職を意識づける。具体的に現場でどういったことをやっているということ、意識してもらおうというのが大事。業界とも積極的につながって行きたい。

(松田委員)

- ・国東高校に設置する土木系学科だが、農業土木を中心にする、地域への就職に繋がるのではないか。国東地域は世界農業遺産などを学びの題材として活用できるし、農地の基盤整備などで地域への貢献の意識も高まる。また、地域が必要とする人材が育成されるため非常に期待が大きい。

(広瀬知事)

- ・国東地域はため池が多く、ため池の管理なども勉強できるようにしないと。
- ・国東に土木人材を育てる学科がないという話と国東高校と双国校との一体化と話の関係があるのか。

(林委員)

- ・双国校は入学定員の3分の2未満の状態が長く続いている。国東高校と双国校の両方に、教員を十分に配置し、子どもたちのニーズに応えられるかということ、現状では非常に難しい。国東高校と双国校を一体化することで、土木系学科を開設し、国東地域での学びを確保できるし、教員の総数を確保し、部活動の活性化、学校の活性化にもつながる。
- ・双国校については、現在、地元と商品開発をしたり、地域住民のIT講座などの特色ある活動をしている。そういったものを引き継ぎながら、世界農業遺産の保全活動などにも関係できるような、教育の充実が図れると考えている。
- ・姫島について、離島の子どもたちが学べるような県立の学生寮の整備を行うことで、充実した学びの場を確保していく。

(工藤教育長)

- ・先日、土地改良事業団体連合会から、災害が起こると市町村の技術者が不足し、マンパワーが足りなくなるため、市町村に人材を送り込めるよう考えてくれとの要望があった。県内の首長からも土木系技術者を養成してくれとの要望を受けている。

(広瀬知事)

- ・災害時は各県で相互協力を行うが、東北でも、去年・おととの中国地方でも、四国でも、応援を要請されるのは大抵は土木系人材だ。全国的に市町村土木系の技術職員が不足している。

(工藤教育長)

- ・設計や施工管理ができるしっかりした技術者がいないと発注するにも時間がかかる。

(鈴木委員)

- ・大分県は、中山間地で山が大変多く、トンネルの数も日本一であり、温泉も大変多いため、砂防技術はかなり高い。公共事業の事業評価委員で、様々な現場では、大変高い土木技術を見るので、災害に強く、いざ災害が起きた時に対応できる県だと感じる。教育委員会、土木建築部及び農林水産部が一緒になって土木系人材の育成を行うとスムーズな取り組みができるのではないかと。

(高橋委員)

- ・日田林工高校は、地震の崩落部分を測量を行い、大分工業高校はドローン技術を使って地元企業とマッチングした。また、三重総合高校は、保護者を対象にし就職説明会を行い、インターンシップなども行っている。
- ・大分の建設業界も、良い採用条件を示さないと良い人材を県外に取られてしまう。

(広瀬知事)

- ・今日は土木建築企画課長が来ているので決意表明をお願いします。

(渡辺土木建築企画課長)

- ・岩崎委員からも説明があったが、建設業界も今、特に若い世代の経営者を中心に、これではだめだということで、一生懸命頑張っている。引き続き知事を筆頭に、きっちりやっていきたい。

(岩崎委員)

- ・進学希望は定員を上回っており、今回土木系学科を増やしても全然問題無い。

(広瀬知事)

- ・農林水産部や土木建築部が仕事の間を作り、教育委員会は学校から人材を送り込むことへの理解を深める意味で、協力いただくことを前提に、本件について前向きに考えさせていただくということで、引き続き検討をお願いしたい。

(2) 人口減少社会の教育課題に対応した遠隔教育の導入について

(内海義務教育課長) 資料に沿って説明

(広瀬知事)

- ・小学生がアバターで美術館を見学する取組はどうだった。

(内海義務教育課長)

- ・双方向のため、即座に自分の質問に対する答えが返ってきて、子供たちは非常に喜んでいた。

(松田委員)

- ・幼児教育では随分前から組織的に遠隔教育を行っている。例えば、鹿児島と北海道の幼稚園が遠隔技術を使って交流しており、北海道の子どもたちが天気の映像を映して、雪がこんなに降ってますと言うと、鹿児島の子どもたちが雪がすごいなと言う。他にも、この時期にはサツマイモを植えますよとか、おいしい食べ物はこれですよといった遠隔地についての知識を得る。子どもたちが小学校、中学校を経て高等学校になった時には、鹿児島の子たちは北海道に行ってみたいと考え、北海道の子たちは鹿児島に行ってみたいと考える。
- ・すべて英語で教育している幼稚園では、インターネットで子供たちが英語で歌を歌ったり劇を行う場面を公開している。

(広瀬知事)

- ・教育委員会は今後どのように進めていこうと考えているのか。

(工藤教育長)

- ・現状では遠隔教育の取組は各地でバラバラに実施されている。財源の問題等があり、市町村ではIT環境の整備ができていないので、まずは充実させることが大事。
- ・試験的に姫島で行うことで、ノウハウを得て、教員を十分に配置できない小規模の学校に展開し、教員の不足を上手く補完したい。過疎地でも教育が確保され、ここに住んでいてもまだ大丈夫だと自信にもつなげたい。

(広瀬知事)

- ・ICTの機器を市町村が整備するのはそんなに難しいことではないのでは。

(工藤教育長)

- ・iPadやスクリーン、プロジェクターの整備に加え、通信環境を整える必要がある。

(林委員)

- ・滋賀県の小学校と双方向授業をおこなったが、うちのクヌギの山の中に先生が来て、そこから、滋賀県にいる小学生に対して私が生中継の授業をやるとか、しいたけ農家が、こちらで料理を作りながら向こうでも家庭科でやるといったものだった。

- ・機器をそろえることは大事だが、機器を使いこなす教員を育てることも大事だ。

(松田委員)

- ・各学校には、技術について何を聞いても分かる専門的な教員を配置することが必要。
- ・不登校児童や病院に入院している生徒が、学校に来ないと単位が取得できないことは問題だと感じる。遠隔教育を活用して、そのような生徒の学習の機会の確保を考えてほしい。

(岩崎委員)

- ・不登校児童生徒に対しては既に法律が整備されていて、学習機会の確保という観点で、環境を整備する必要がある。
- ・病気療養児については制度的な対応は定められていないが、同様の対応ができれば、非常に良い。

(鈴木委員)

- ・私の子どもたちが通ってる学校は小規模で、強い発言をする子の意見に偏ってしまう。わざわざ出かけなくても、色々な意見を持った人間と意見交換ができる場があるのは非常に大きいし、また、それが世界と繋がるというのはグローバルな視野が広がると期待をしている。
- ・私が住んでるところは通信環境が非常に悪いので、通信環境の整備も業界、県を挙げて取り組んで欲しい。

(高橋委員)

- ・佐賀県でも遠隔授業は色々な情報や講師の講義で勉強ができるため非常に役に立っている。
- ・小規模校では生のコミュニケーションを図る機会が少ないため、大規模の高校などに進学した際にどのようにコミュニケーションを図っていくかというのは課題だと感じる。

(広瀬知事)

- ・そのためにも、小規模校の生徒は遠隔授業を活用し、色々な垣根を越えることが大事になる。

(高橋委員)

- ・例えば、くじゅうアグリ創生塾などの施設を利用し、修学旅行のような形で生徒を集めて、コミュニケーションを図るのも手法の一つなのではないか。遠隔授業で話しても、実際に人と会って話すことは難しい。実際に会って話してみないと伝わるものと伝わらないものが分からない。

(広瀬知事)

- ・今年度、教育大綱を策定する中で、通信環境を含めた遠隔教育の条件整備について教育委員会からいつまでに整備するといった打ち出しをしてもらおうと推進する大きな力

になる。

- ・教育を皆が等しく受けられるように、計画的に条件を整備することが必要だ。

-----終了